

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：99999

研究種目：奨励研究

研究期間：2022～2022

課題番号：22H04145

研究課題名 小学校国語科における読解力の向上を目指した児童によるリライト教材作成とその効果

研究代表者

勝井 まどか (KATSUI, Madoka)

鈴鹿市立合川小学校・小学校教員

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 460,000円

研究成果の概要：JSL児童のために日本語話者の児童にリライト教材の作成をさせ、その効果を言葉の理解力向上、JSL児童の困り感への理解促進、自己有用感の向上の観点で調査した。「リライトの作成が自分の役に立ったか」に対して、91%の児童から肯定的な回答を得た。自由記述では「言葉の違う表現方法を学び、言葉を深く考えるきっかけとなった」という意見が多く見られた。何気なく使っている言葉をさらに深く考えるきっかけになった可能性は高い。また、質問紙の結果から、JSL児童の言語的な困り感に対する理解が促進された可能性が示唆された。さらに、自己有用感については、64%が肯定的な回答をし、一定の有用感を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本社会において、日本語を母語としないJSL児童の増加は今後も続くことが予想されている。とくに初等教育の段階では、JSL児童への日本語教育も重要な課題であるが、JSL児童の困り感に対する周りの児童の理解促進も必要である。

JSL児童が使用するリライト教材を日本語話者の児童が作成することで、JSL児童の困り感への理解促進につながるとともに、作成した児童自身の言葉の深い理解や役立ち感をともなった自己有用感につながることが示唆された。

研究分野：初等教育

キーワード：JSL児童 困り感への理解促進 読解力 自己有用感

1. 研究の目的

JSL 児童(JSL:Japanese as a Second Language)とは、日本語を母語としない子どもたちのことで、近年増加しており、JSL 児童が抱えている言語的な困り感は、周りの日本語話者の児童にはなかなか理解されにくい。また、JSL 児童のみならず日本語話者の児童においても、高学年の国語科の学習では、教材文の1文が長くなり、文どうしの係り方も複雑になるため、読解力に個人差が生じやすい。

本研究では、JSL 児童のためのリライト教材(図1)を日本語話者の児童に作成させる学習をおこなうことで、以下の3点を明らかにすることを目的とした。

- (1) 児童がリライト教材を作成することが、作成した児童の読解力のもととなる言葉の理解の向上に効果があるか。
- (2) 児童がリライト教材を作成することが、JSL 児童の困り感に対する理解促進につながるか。
- (3) リライト教材の作成が、作成した児童の自己有用感の向上に効果があるか。

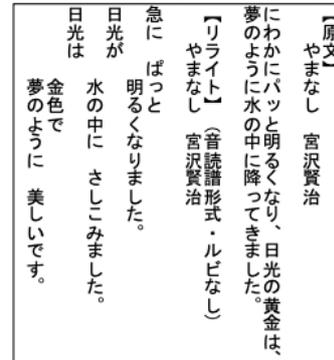


図1 リライト教材例(小6国語)

2. 研究成果

実践では、以下の6点に留意させ、日本語話者の児童にリライト教材を作成させた。

- (1) 1文は5文節程度の短文にする。
- (2) 複文は2文に分けて接続詞を補う。
- (3) 敬体(です、ます)とする。
- (4) 漢字には、かなルビを振る。
- (5) オノマトペやキーワードは原文のまま使う。
- (6) 挿絵や場面絵を活用する。

リライト教材作成のプレ・ポストでおこなった言葉の理解度テストの結果、平均には有意な差はみられなかった。そのため、リライト教材の作成が児童の言葉の理解向上に直接効果があったかについては明確にはいえない。

しかし、質問紙の「リライトの作成が自分の役に立ったと思いますか」の項目に対して、91%の児童から肯定的な回答が得られた。自由記述では、「辞書を使って似た意味を持つ言葉を探せた」「辞書をたくさん使って慣れた」「言葉の違う表現方法を知ることができた」といった記述が多くみられた。言葉の理解度テストの結果には有意な差はみられなかったが、本実践が普段何気なく使っている言葉をさらに深く考えるきっかけになった可能性は高い。

また、「対象児が学習で困っていることは何ですか」の項目に対する自由記述では、「会話のスピードについていけない」「漢字の読み方が分からない」「言葉の意味が分からない」といった回答が得られた。このことから、実際にリライト教材を作成することで、対象児の言語的な困り感に対する理解の促進につながったと言える。

さらに、「リライトの作成が対象児の役に立ったと思いますか」という質問に対して、64%の児童から肯定的な回答が得られた。このことから児童に一定の有用感を与えることができたと考えられる。

一方、否定的な回答をした児童の自由記述では、「言葉をやさしくしようとして、逆に分かりにくい日本語になった気がしたから」という意見が複数あり、対象児の日本語レベルに合わせることの難しさが示唆された。

日本社会において、日本語を母語としないJSL 児童の増加は今後も続くことが予想されている。とくに初等教育の段階では、JSL 児童への日本語教育も重要な課題であるが、JSL 児童の言語的な困り感に対する周りの児童の理解促進も重要なことである。

今回は、リライト教材の作成は、1回の実践となったため、さらに継続した取り組みを進め、効果を検証したい。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
福島 耕平	(FUKUSHIMA Kohei)